

# 保育の中の小さなこと大切なこと⑧

—— “しかる” ということ ——

守 永 英 子



九月号に “しかる” ということについて書いたが、再び “しかる” ということについて書きたいと思う。というところ、私の保育の中で “しかる” ということが重要な位置を占めているようであるが、私は、自分ではあまり子どもをしかることがないと思っている。多くの保育者が恐らくそうであるように、私のクラスの子どもたちも、 “先生はやさしい” と母親に言ってくれているようである。それは、時に世間で誤解されることがあるように、子どもを甘やかしているためにしからないのではなく、望ましくない行動をした結果を、しかって改めさせることよりも、望ましい行動をするようにしむけることが、初めから保育の中核と考えられているからである。そしてまた “しかる” ということが、大人の側の理由如何に関係なく、保育の基礎として欠くことのできない、保育者と子どもとの間の信頼関係が育つことを妨げることがあり

得るからである。といっても、幼児との生活の中で、しかなければならないことや、私自身怒りを感じるものが全くないわけではない。

五月の初めのことであった。 “おかたづけ” の呼びかけが子どもたちの間にひろがって、帰る前の片づけが始まった。遊戯室で遊んでいたU男たちのグループが保育室に戻ってきた。保育室も片づけが始まっていたが、画用紙を切りぬいて何か小さなものをいくつも作っていたT夫は、まだその仕事を続けていた。 “おかたづけだよ” と近づいたU男は、T夫の作ったものに目をとめて 「なに？へび？」 と手にとった。 「変なの」「どれ、みせて」とS男が引っぱった。やりとりしている二人の間で、へびはちぎれた。それから二人は、おもしろそうにへびをちぎり始めた。

去年から在園していて、気持ちのままにふるまえるU男た

ち。入圍して間もない、まだ緊張のほぐれないT夫。自分が作ったへびがちぎられるのを、何も言えずに見ているT夫の気持ち、痛いほど伝わってくるのを感じて、私は怒りが込み上げてきた。片づけの手を止めて子どもたちを見つめ、一息のみこんで「Uちゃん！」とがめた。「一生懸命作ったものをこわされたら、あなただつていやでしょう？」

私の声に救われたかのように見上げたT夫の顔に、自分がされたことへの（と思われる）不快感があふれ出た。私の声のきびしさのためか、あるいは調子づいた気持ちから我に帰ったためか、U男たちはしゅんとして、素直にうなずいた。「Tちゃんが折角作ったのにね」と声をかけながら、ちぎれたへびをセロテープで直しかけたが、その時には私にもU男の立場を思いやる心のゆとりが戻っていた。

「Tちゃんに、これでいいかどうか聞きながら直してあげてね」と、U男に直しかけたへびを渡すと、U男は「ごめんね」とあやまり、一生懸命直し始めた。T夫の表情は次第に治まり、U男が「できた。これでいい？」とT夫に見せ、「Tちゃん、これでよかった？」と私が声をかけた時は、T夫は素直にうなずいた。ほっとして、ふと気がつくと、M男

がいつもの笑顔で私を見上げていて、「先生って、強いんだね」と感嘆したように言った。

J男が石で窓ガラスを割った時と違い、何故こんなに怒りを感じたのか。恐らく、U男たちの行動によって傷ついたものが「物」でなく、「人間の心」であったからに違いない。怒りをそのままとがめるという形で表現したのは、U男と私との間には一年間育くんた関係があったからである。その関係は絶えず注意深く育て続けなければならぬ。

私は、きびしくとがめた後、彼が償える道を示し、償った彼を受け入れた。私のとつた方法が充分であるかどうかは分からない。しかし、この小さな出来事の中に、保育者として、T夫の傷ついた心をいやすこと、U男を自分を否定されたような不安におとし入れることなく、その行動を改めることを受け入れるようにしむけること、T夫とU男の気持ちが互いにこれ以上マイナスにならないように、できればプラスに転じさせたいこと、私が筋を通すことを目的とするのでなく、この出来事の中で、保育者も含めて人と人との関係を育てたいこと、などのさまざまな思いや願いをこめたのである。  
(お茶の水女子大学附属幼稚園)